

「回文詩」考一朝倉荊山の一作品より一

日原, 傳

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要 / 法政大学教養部紀要

(巻 / Volume)

107

(開始ページ / Start Page)

95

(終了ページ / End Page)

116

(発行年 / Year)

1998-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003613>

「回文詩」考

—朝倉荆山の二作品より—

日原 傳

一、はじめに

柏木如亭（二七六三—一八一九）が編んだ『海内才子詩』に朝倉荆山（二七五五—一八一八）の「廻文」と題する漢詩が一首取められている。

『海内才子詩』は、如亭が土御門公安倍菊坡の依頼を受けて編んだ全国的規模の詞華集であり、如亭の亡くなった翌年の文政三年（一八二〇）に刊行されている。如亭の後を受けて刊行した鈴木竹坡の「例言」によれば、刊行の八、九年前までには編集もだいたい終わり、版木も彫られていたようだが、如亭が四方を遊歴し、たまたま京都に來ても、その滞在が短かったために校定がなされず、如亭の生前に刊行されることがなかったという。^①『海内才子詩』の構成は、「平安之部」「江戸之部」「大坂之部」「各国之部」「羽流縉流之部」「閩秀之部」の六部に分かれる。荆山の詩は「平安之部」に取められている。

朝倉荆山は、名を璞、字を琢卿と言ひ、荆山と号した。俗称は玄蕃。墓は京都市半町の迎称寺にあるという。著書として『孟子文階』一冊があり、文化十四年（一八一七）に刊行されている。『海内才子詩』卷一に、京都の岡崎櫛亭（一七八四—一八五〇）の「和朝倉荆山賞月三井寺」と題する詩が取められており、櫛亭と交流のあったこと

平江 緑廻かにして 水洲を回る

豁望 吟行 客愁を散ず

征鴈 断雲 秋漠漠

急砧 寒吹 晚颼颼

晴暉 浦に落ちて 漁蓑曬し

秀穎 田に垂れて 禾稼収む

鳴瀬の石梁 邨屋矮し

傾崖の柳影 流れに倒れて浮かぶ

「海内才子詩」にはこの形で載せられている。「漠漠」はさびしいさま。「寒吹」は寒風。「颼颼」は風の音の形容。韻字は、洲・愁・颼・収・浮（下平声十一尤）。この七律の語順を逆転させるともう一つの詩を読むことが出来る。右の詩を「廻文」詩の「表」の詩とすれば、次に掲げる「裏」の詩は「表」の詩の第八句末尾の「浮」の字から始まって、第一句冒頭の「平」で終わる七律になる。

廻文（裏）

浮流倒影柳崖傾 ○○○●●○○○◎

矮屋邨梁石瀬鳴 ●●●○○○○◎

収稼禾田垂穎秀 ○●●○○○○●

曬蓑漁浦落暉晴 ●○○○○●○○◎

颼颼晚吹寒砧急 ○○○●○○○○●

漠漠秋雲断鴈征 ●●○○○○●◎

愁客散行吟望豁 ○●●●●●●●
 洲回水迴綠江平 ○○○○○○●●

浮流の倒影 柳崖傾き

矮屋 郵梁 石瀬鳴る

取稼の禾田 垂穎秀づ

曬蓑の漁浦 落暉暗れやかなり

颯颯たる晚吹 寒砧急に

漠漠たる秋雲 断鴈征く

愁客 散行して 望豁に吟ず

洲は回り 水迴かにして 綠江平らかなり

韻字は、傾・鳴・晴・征・平（下平声八庚）。

二首とも晩秋の農村の情景が読まれている。同一の五十六字で構成されている訳であるから読まれた世界が似てくるのは仕方のないことであろう。頷聯、頸聯の対句はきっちり作られている。詩の下に二首の平仄を图示しておいたが、二四不同、二六対、粘法といった近体詩の格律も守られている。

三、広義の回文詩

先に漢詩における「回文詩」は「冒頭から読んでも、末尾から読んでも意味をなし、押韻等の格律が守られている詩」と定義しておいた。しかし、それは狭義の「回文詩」という概念であり、それ以外の形式をも含む広義の「回

文詩」という概念が使われる場合もある。

「回文詩」に関する著作としては、代表的なものとして宋の桑世昌が編んだ『回文類聚』四巻が挙げられる。この書はその名の通り歴代の回文詩を集めた総集であるが、そこに収められているのは広義の意味での「回文詩」である。桑世昌は淮海の人。陸游の甥とされる人物である。

「回文類聚」は見やすいものとして、『文淵閣四庫全書』所収本がある（以下、文淵閣本と称する）。原篇に清の朱存孝が補った「補遺」が付いているが、補遺の部分は、清の高宗（乾隆帝）の勅令によって淫逸の篇が削られており、完全なものではない。一方、東京大学総合図書館の覚廬文庫に一本が収められており（以下、覚廬文庫本と称する）、原篇四巻に清の朱象賢の補った別篇の「織錦図」および「統篇」十巻が加わった大部の構成となっている⁶。覚廬文庫本「統篇」末尾に載せる胡瓊の文章に依れば朱存孝と朱象賢は同一人物であるという。ただ、文淵閣本に載せる朱存孝の「序」と覚廬文庫本に載せる朱象賢の「序」とは全く別のものである。

「回文類聚」原篇四巻部分について言えば、文淵閣本と覚廬文庫本では、巻首の序跋部分を除くとさほど大きな違いは見られない。小さな違いでは、覚廬文庫本で作者を失名としている巻二の二つの「擬織錦図」の作者を文淵閣本では裴逸と孫明復に割り当てている点、逆に巻三所収の蘇軾「晚眺」について覚廬文庫本には長い後注が付されているのに対し文淵閣本では「此首神智体」という簡単な前書きが付されるのみである点など、情報量としては相互に出入りのある関係になっている。文淵閣本では補遺に所収されている達磨「回文」および唐太宗「回文」が、覚廬文庫本では原篇巻二の末尾に附録されている点が配列としては一番大きな違いであるが、それについては覚廬文庫本の原篇巻首に載せる朱象賢の序で彼自身が原篇に組み入れたことを述べている⁷。

以下、覚廬文庫本をテキストとして原篇四巻についてその構成を見てみよう。

巻一は蘇蕙の「璇璣図」を中心に据えた巻である。図の前に叙が置かれ、図の後には図の読法、再叙、又叙、跋、攷異が付く。その間に黄庭堅、秦觀、蘇軾が「璇璣図」をテーマにして詠んだ詩も添えられている。「璇璣図」は漢字を縦横二十九字ずつ計八百四十一字並べた図である。

参考までに「晋書」列女伝の関連記事を引く。

竇滔の妻の蘇氏は、始平の人なり。名は蕙、字は若蘭。善く文を属る。滔、苻堅の時、秦州刺史と為り、流沙に徙さる。蘇氏之を思ひ、錦を織りて迴文旋図詩を為り、以て滔に贈る。宛転循環以て之を読む。詞甚だ悽惋、凡そ八百四十字、文多く録さず。⁽⁸⁾

ここで言う「迴文旋図詩」は「瑿機図」(寛廬文庫本「回文類聚」卷二)のこと。「璇機図」(文淵閣本「回文類聚」卷一)、「織錦図」(「回文類聚」卷一、蘇軾「題織錦図」)などその名称は多数あるが、皆同じものを指している。

卷二は「瑿機図」以外の諸家の図とその読法および関連の序跋で構成されている。「盤中図」、「盤鑑図」、「玉連環」(七図)、「通貫回文」、「脱卸連環」(二図)、「錦纏枝」、「藏頭拆字詩」、「擬織錦図」(二図)が並び、末尾に前述した達磨と唐の太宗の「回文」が付いている。

巻頭の「盤中図」の詩は『玉台新詠』巻九に収める三言七言古詩の「盤中詩」に当たるものであるが、あくまでもその詩は「図」として呈示され、詩の末句に「当従中央周四角(当に中央従り四角に周るべし)」とあるように円盤の中央に置かれた「山」の字から始めて周囲を六重に取り囲む計百六十七字を一周回ることに読む方向を反転させて内周から外周へ読み進めてゆく形をとっている。⁽⁹⁾

卷三は古体詩十二首(作者九名)、近体詩三十八首(作者十七名)を収める。これらの詩が狭義の回文詩に当たる。卷四は詩余(詞)の作品を収める。詞牌ごとに分類され、「菩薩蛮」四十九首、「西江月」三首、「瑞鷓鴣」一首、「阮郎帰」一首、「虞美人」一首の計五十五首(作者十四名)である。⁽¹⁰⁾

以上の構成から分かることは、桑世昌の「回文類聚」は大きく分けて二つの方向性をもつ作品をその編著の中に包みこんでいる点である。すなわち卷一・二に収められた「図」を中心にした「回文」と卷三・四に多く見られるオーソドックスな文字表記に従った詩や詞の「回文」の二系統である。「回文類聚」所収の「盤中図」が『玉台新詠』

所収の「盤中詩」と呼応しているようにその間には交換可能な要素もある訳だが、視覚的な印象は圧倒的に違う。回文詩は本来遊戯的性格を強く持つ形式の詩なのだが、「図」を中心に据えた回文詩はその遊戯性がより濃厚に備わっていることは明らかである。

四、回文詩の起源

回文詩の起源については「四庫全書總目提要」の「回文類聚」の項目に言及がある。そこでは、劉宋の賀道慶、蘇蕙の「璇璣図」、曹植の「鏡銘八字」、蘇伯玉の妻の「盤中詩」に起源を求める四つの説が考察されている。

回文類聚四卷、補遺一卷（編修汪如藻家藏本）

宋の桑世昌編。世昌に「蘭亭考」有り。己に著録す。考ふるに劉勰の「文心雕龍」に曰く、「回文の興る所、則ち道原を始めと為す」。梅庚註に謂ふ、「原は当に慶と作るべし。宋の賀道慶なり」。蓋し其の時璇璣図詩未だ出でず、故に勰然云ふ。世昌、蘇蕙の時代の前に在るを以ての故に用て始を為託す。且つ像を前卷首に繪き、以て擬造之功を明らかにす。其の説良に是なり。然るに「藝文類聚」は曹植の鏡銘八字を載す。回還して之を読むに、文を成さざるなし。実に蘇蕙以前に在り。乃ち以て始めと為すを標せず、是れ亦た稍疎。又蘇伯玉の妻の盤中詩、滄浪詩話に據る。玉台新詠自り以外、別に典故なし。旧本具に在れども、図有るを聞かず。此の書一円図を繪くに、本づく所を知るなし。考ふるに原詩の末句「当に中央従り四角に周るべし」と称すれば、則ち実は方盤にして円盤に非ず。図く所殆ど亦た妄なり。唯だ是れ咏歌漸く盛にして、工巧日に増し、詩家既に此の一途を開く。竟には廢するべからず。録して之を存すれば、亦た以て博洽に資するに足る。是の書の末に世昌の自跋有りて、至道の御製を卷首に登載すと称す。此の本之れ無し。殆んど伝写の佚脱か。其の補遺一卷は、則ち国朝康熙中蘇州朱存孝の採る所、兼ねて明人に及ぶ。然るに明典故中に載する所の御製回文詩三十図、耳目の前に在る者、即

ち已に収めざれば、則ち漏るる所亦た多し。姑く附存して以て参考に備ふ、云爾。

「回文類聚」卷一所収の蘇蕙の「璿璣圖」、卷二所収の「盤中図」は前章で述べたように図を中心とした回文詩である。

曹植（一九二—二三二）「鏡銘八字」については、「回文類聚」には原篇、続篇ともこの作品を載せない。「曹子建集」（四部叢刊本）にも見えない。「四庫全書總目提要」の「曹子建集」の項目には「鏡銘八字、反覆転倒すれば、皆な叶韻し文を成す、実に回文の祖為り、「藝文類聚」に見ゆ」とある。しかし、現在本の「藝文類聚」には作品は見えない。「藝文類聚」卷七十三、雜器物部「盤」の項目の「銘」の箇所には曹植の「承露盤銘」を収めており、その直後に晋の殷仲堪（？—三九九）の「酒盤銘」二首を図の形で掲げている。その殷仲堪の「酒盤銘」は「回文類聚」卷二に図の形で入っている。「礼節有宜体悦酒為」「狂樂惑最觴惡德醉」のそれぞれ八字ずつが円環をなす形で布置されている図である。八字のうちどの一字から始めても「四庫全書總目提要」の言う「反覆転倒すれば、皆な叶韻し文を成す」という条件に叶う銘である。「鏡銘八字」の存在は不明だが、仮に存在するとすればこの「酒盤銘」に似た形式のものと推定される。

賀道慶（生卒不明）に起源を求める説は梁の劉勰（四六六？—五三二？）の「文心雕龍」に由来する。しかし、劉勰自身が賀道慶であると述べている訳ではない。「文心雕龍」明詩篇には雜体詩に言及した次のような記述がある。

三六雜言に到りては、則ち篇什より出づ。離合の発は、則ち図讖に萌す。回文の興る所は、則ち道原を始めと為す。聯句の韻を共にするは、則ち柏梁の余製なり。

「文心雕龍」明詩篇は太古から劉勰にとつての近代までの詩の發展の歴史を述べた篇であるが、その末尾に離合詩、回文詩、聯句詩といった遊戯的色彩の強い詩の起源を述べている。すなわち、三言詩・六言詩・雜言詩の場合は「詩

經」。離合詩は「讖緯の書」。回文詩は「道原」。聯句詩は「柏梁体」に劉勰は起源を求めた。劉勰が回文詩の起源と考えた「道原」について、明の梅慶生（子庚）がその『音注本』の中で「宋の賀道慶作の四言回文詩一首、計十二句、四十八言、尾従り首に至り、読めば亦た韻を成す。而して道原考ふる可き無し。恐らくは原は慶字の誤なり」と注をつけており、これが賀道慶説の源であるとされる。しかし、狭義の回文詩を収める「回文類聚」卷三の巻頭に賀道慶の「四言」回文詩、「春遊」回文詩^①が置かれていることを考えると、宋の桑世昌は既に賀道慶の作品を狭義の回文詩の起源あるいは少なくとも当時目にすることの出来た最も古い作品であると考えていたと推定される。

なお、この狭義の回文詩に関しては、唐の皮日休（八三三？—八八三）の「雜体詩序」に次のような起源説も見える。

晋の傅咸に「回文反覆詩」二首有りて云ふ「其文を反覆するは、以て憂心の展転たるを示すなり。『悠悠遠邁、我れ独り榮榮』」是なり。是に由りて反覆興れり。晋の温嶠に「回文虚言詩」有りて云ふ「寧神静泊、有を損し亡を崇ぶ」。是に由りて回文興れり^②。

傅咸（二三九—二九四）と温嶠（二八八—三二九）の作品を起源とする説である。時代としては賀道慶に先んずることになる訳であるが、残されている回文の長さはいずれも四言二句に留まっている。

『四庫全書総目提要』が述べる回文詩に関する四つの起源説について言えば、時代的な前後とその作品の信憑性が問題にされている訳だが、各説に取り上げられた詩の形式を考えてみると広義の「回文詩」の代表的な形式が取り上げられた形にもなっている。

「碁機図」の類は図として呈示された限られた数の漢字の配列の中にたくさんの詩を潜ませる試みである。

「盤中詩」の類は図の中に一筆書の形で詩を埋め込む。曲線、反転などが特徴的である。

「鏡銘八字」の類は「玉連環」の詩と考えられる。八字なり二十字なりといった限られた漢字を円環状に布置し、

どの一字から始めても又どちらの方向に読み進めても意味をなすものである。小さな作品ながら完成度の高さが求められる。

賀道慶に起源が求められた形式が狹義の回文詩ということになる。「回文詩」の歴史の中では一番オーソドックスな形として作られてきたものである。朝倉荆山の「廻文」詩もこの形式を襲うものであることは明らかであろう。その賀道慶「四言」の詩を具体的に見てみよう。

四言（表） 賀道慶

陽春艶曲	陽春の艶曲
麗錦誇文	麗錦の誇文
傷情織怨	傷情 怨を織り
長路懷君	長路 君を懷ふ
惜別同心	惜別 心を同じくし
膺墳思悄	膺墳ぎ 思ひ悄たる
碧鳳香殘	碧鳳 香は残し
金屏露曉	金屏 露の曉
入夢迢迢	夢に入ること 迢迢
抽詞軋軋	詞を抽くこと 軋軋
泣寄回波	泣きて回波を寄せ
詩緘去札	詩緘 札を去る

「陽春艶曲」は高尚な歌曲とされる。「陽春白雪」のことか。「誇文」は美麗な文章。「膺」は胸。「迢迢」は長く久

しいこと。「軋軋」は進み難いさま。「回波」は文章の変化に富むこと。「詩緘」は詩を使って書いた手紙。「札」は手紙。「瑤機函」をテーマとした作品である。四句ずつで換韻している。韻字を「広韻」に従って示すと、文・君（平声文韻）、悄・暁（上声篠韻）、軋・札（入韻黠韻）となる。同じ詩を末尾から冒頭に回って読むと次のようになる。

四言（裏） 賀道慶

札去緘詩 札去りて 詩を緘じ

波回寄泣 波回りて 泣を寄す

軋軋詞抽 軋軋 詞を抽き

迢迢夢入 迢迢 夢に入る

暁露屏金 暁露 屏は金

残香風碧 残香 風は碧

悄思填膺 悄思 膺を填め

心同別惜 心は別れの惜しみを同じくす

君懷路長 君は路の長きを懐ひ

怨織情傷 織るを怨みて情傷む

文誇錦麗 文は錦麗に誇り

曲艶春陽 曲は春陽に艶たり

「緘」は手紙の封をすること。この詩も四句ずつで換韻している。韻字を「広韻」に従って示すと、泣・入（入声緝韻）、碧・惜（入声陌韻）、傷・陽（平声陽韻）となる。

五、朝倉荆山「廻文」詩に先行する作品

以下、紙幅を利用して朝倉荆山の「廻文」詩に先行する作品をいくつか見てみよう。荆山が目にしてきた可能性をもつ作品である。

荆山が「回文類聚」を読んでいたか否かは分からない。しかし、読む機会がなかったとしても「回文類聚」に収める蘇軾の回文詩は蘇軾の別集等で読んでいた可能性が高い。たとえば、蘇軾の「記夢」回文二首（「回文類聚」卷三所収）および「題織錦図」回文三首（「回文類聚」卷一所収）は、正保四年（一六四七）の刊記をもつ和刻本「東坡先生詩集」巻八および巻二十九、明暦二年（一六五五）の刊記をもつ和刻本「増刊校正岡状元集註分類東坡先生詩」巻六および巻二十四にそれぞれ収められている。さらに両作品は文化四年（一八〇七）の村瀬栲亭の序文を付す村瀬石齋選、田能村孝憲訂の和刻本「蘇東坡絶句」巻三にも収められている。宋金時代は回文詩が非常に盛んになった時代であり、蘇軾はその名手として知られる。その「記夢」という作品二首を見てみよう。詩序に創作の経緯が記されている興味深い例である。

十二月二十五日大雪、始めて晴る。夢に人雪水を以て小团茶を烹、美人をして歌うて以て余に飲ましむ。夢中に為に回文の詩を作る。覚めて其の一句を記す。云く「乱点の余花碧衫に唾す」と。意は飛燕が唾花の故事を用ふるなり。乃ち之を續ぎて二絶句を為りて云ふ。

記夢 其一（表）

酡顔玉盃捧織織 酡顔 玉盃 捧げて織織

乱点余花唾碧衫 乱点の余花 碧衫に唾す

歌咽水雲凝静院　　歌咽んで　水雲　静院に凝る
 夢驚松雪落空巖　　夢驚きて　松雪　空巖に落つ

記夢 其一（裏）

巖空落雪松驚夢　　巖空しく　落雪　松夢を驚かす
 院静凝雲水咽歌　　院静かに　凝雲　水歌に咽ぶ
 衫碧唾花余点乱　　衫碧　唾花　余点乱る
 織絨捧盃玉顔酩　　織絨として盃を捧ぐ　玉顔酩たり

「酩顔」は酒であかくなつた顔。「織絨」は女子の美しい手の形容。「唾碧衫」は漢の成帝の寵を奪つた趙飛燕が誤つて班婕妤の衣に唾をつけた時、婕妤がそれを石上の花に髣えた故事（趙飛燕外伝）を踏まえる。表の詩の韻字は織（下平十四塩）と衫・巖（下平十五感）の通押。裏の詩の韻字は歌・酩（下平五歌）。裏の詩は起句と承句が対句仕立てになつてゐるので第一句末を踏み落としたのである。

記夢 其二（表）

空花落尽酒傾缸　　空花　落ち尽して　酒缸を傾く
 日上山融雪漲江　　日上り　山融して　雪江に漲る
 紅焙浅甌新火活　　紅焙の浅甌　新火活す
 龍团小碾闌晴窓　　龍团　小碾　晴窓に闌はしむ

記夢 其二(裏)

窓晴闔碾小团龍 窓晴に碾を闔はす 小团龍
 活火新甌浅焙紅 活火 新甌 浅焙紅なり
 江漲雪融山上日 江漲り 雪融す 山上の日
 缸傾酒尽落花空 缸を傾くれば酒尽き 落花空し

「焙」は茶をほうずること。「龍团」は上等の茶。龍鳳茶とも言い、压榨して固めた「团茶」に龍鳳の紋様がつけられている。「碾」は石臼でひいて粉にすること。「闔」は闔茶。茶の優劣を争うこと。表の詩の韻字は缸・江・窓(上平二江)。裏の詩の韻字は龍(上平二冬)と紅・空(上平一東)の通押。

狭義の回文詩の日本における古い例としては『本朝文粹』卷一所収の橘在列の作品が知られている。¹⁸⁾

廻文詩(表)

橘在列

寒露晚霑葉	寒露 晚に葉を霑し
晚風涼動枝	晚風 涼しく枝を動かす
残声蟬嘒嘒	残声 蟬嘒嘒
列影鴈離離	列影 鴈離離
蘭色紅添砌	蘭色 紅にして砌に添ひ
菊花黃滿籬	菊花 黄にして籬に滿つ
团团月聳嶺	团团として 月嶺に聳え
皎皎水澄池	皎皎として 水池に澄む

廻文詩（裏）

池澄水皎皎

池澄みて 水皎皎

嶺聳月团团

嶺聳え 月团团

籬滿黃花菊

籬に満つ 黃花の菊

砌添紅色蘭

砌に添ふ 紅色の蘭

離離鴈影列

離離として 鴈影列なり

嘒嘒蟬声残

嘒嘒として 蟬声残る

枝動涼風晚

枝動きて 涼風晚れ

葉霑晞露寒

葉霑ひて 晞露寒し

「嘒嘒」は蟬の声。「離離」は長く連なるさま。「砌」は軒下の石だたみ。秋の物色を描写した全対格の詩である。裏の詩もきっちりした仕上がりになっているのは、五言の全対格の詩であることが与かっているのであろう。表の詩の韻字は枝・離・籬・池（上平五支）。裏の詩の韻字は団・蘭・残・寒（上平十四寒）。

最後に荆山の時代に近い例を一つ挙げておこう。

袁枚「随園詩話」巻十四に、次のような記事がある。

丙辰の召試に、康熙癸巳の編修雲南の張月槎先生有り。名は漢。年七十余、重ねて詞館に入る。先生前輩を以て自から居る。而るに丙辰の翰林同年を以て之を視んと欲す。彼此抵牾す。後五十年、余粵東に遊び、封川の邑宰彭公竹林の署中に飲む。西席の張旭出でて見ゆるに、詢わて先生の嫡孫為るを知り、急かに先生の遺稿を問ふ。渠僅かに「秋夜回文」一首を記して云ふ「烟深臥閣草凝愁、冷夢驚回幾樹秋。懸壁四山雲上下、隔簾一水月沈浮。

翩翩影落飛鴻雁、皎皎光寒靜斗牛。前路客歸螢点点、辺城夜火似星流」。

袁牧は康熙五十五年（一七一六）に生まれ、嘉慶二年（一七九七）に没した。その晩年に出版された『隨園詩話』は当代の詩人たちの作品を論評したもので、彼の性靈説は其中で多くが展開された。『隨園詩話』の正確な刊行年はよく分らない。簡有儀は正編十六巻は遅くとも乾隆五十六年（一七九一）には刊行され、補編十巻は嘉慶二年（一九九七）には刊行されたと推定している。¹⁵ 日本にはその乾隆五十六年すなわち寛政三年（一七九一）にすでに長崎にもたらされており、その後寛政六年・十二年にも船載された記録がある。¹⁶ また柏木如亭が較閲した神谷東溪編の和刻本『隨園詩話』十巻補遺二巻も文化元年（一八〇四）に刊行されている。その内容は本来の『隨園詩話』を抄録したものであるが、右に引いた張漢の回文詩も詩のみ「秋夜回文」の形で収められている。¹⁷ 江湖詩社の詩人たちが『隨園詩話』を長崎新渡後ほどなく読んでいることも知られている。¹⁷ 朝倉荆山の経歴自体不明な点が多いが、生卒年から考えて張漢の回文詩を読んでいた可能性は高いと思われる。

張漢は雲南石屏の人。右に引いた『隨園詩話』に依れば、康熙五十二年（一七一三）に翰林院編修に入った張漢は、乾隆元年（一七三六）に再び翰林院に入ったことになる。その時のいざこざが『隨園詩話』の一つの話柄になっている。¹⁸ 以下、「秋夜」回文を具体的に見てみよう。

秋夜回文（表）

烟深臥閣草凝愁 烟深く 閣に臥せば 草愁を凝らす

冷夢驚回幾樹秋 冷夢 驚き回れば 幾樹の秋

懸壁四山雲上下 懸壁の四山 雲上下し

隔簾一水月沈浮 隔簾の一水 月沈浮す

翩翩影落飛鴻雁 翩翩として 影は落ち 鴻雁飛ぶ

皎皎光寒静斗牛
前路客帰螢点点
辺城夜火似星流

皎皎として 光は寒く 斗牛静かなり
前路 客は帰る 螢点点
辺城の夜火 星の流るるに似たり

秋夜回文(裏)

流星似火夜城辺
点点螢帰客路前
牛斗静寒光皎皎
雁鴻飛落影翩翩
浮沈月水一簾隔
下上雲山四壁懸
秋樹幾回驚夢冷
愁凝草閣臥深烟

流星は火に似たり 夜城の辺
点点 螢は帰る 客路の前
牛斗 静寒 光皎皎
雁鴻 飛落 影翩翩
浮沈の月水 一簾を隔て
下上の雲山 四壁懸かる
秋樹 幾たび回りにて 驚夢冷やかなり
愁は草閣に凝り 深烟に臥す

「表」の詩の韻字は愁・秋・浮・牛・流(下平十一尤)。「裏」の詩の韻字は辺・前・翩・懸・烟(下平一先)。

六、おわりに

江戸時代の安永・天明期に京坂詩壇において詠物詩が流行したことが知られている。朝倉荆山と交流のあった岡崎榭亭の父廬門の師に当たる龍草廬の詩集『草廬集』は安永八年(一七七九)に成っているが、その五編卷三に次のような記述がある。

近年、京師浪華の二都の白面の諸生、好みて詠物の詩を作る。盛んにして風を為す。其の作可否有りと雖も、大氏醜陋なるもの維多し。恥ずべきの甚しきものなり。夫れ詠物亦た一格。講ぜざるべからず。而れども偏に之を好めば則ち大いに風雅の本色を損す。慎まざるべけんや。予也た物を詠ずるを好まず。偶々浪華の某氏有り。強いて焉を請ふ。是に於いて已むを得ず、姑く時好に従ひて火吹竹・牡丹餅の二首を詠ず。是れ所謂醜陋の魁なる者なり。

龍草廬は、詠物詩の流行を批判的に見てゐる訳であるが、右の文から逆に流行のさまをうかがい知ることが出来る。日本人の手になる詠物詩集も伊藤君嶺編『日本詠物詩』（安永六年刊）をはじめとしてこの時期から出版が相次いだ。その中で、詠物の対象として新奇なものを好んで詠みこんだ詩集として太田玩鷗の『玩鷗先生詠物百首』（天明三年刊）『玩鷗先生詠物雜体百首』（寛政六年刊）という二書が挙げられる。玩鷗は「麁筆帽（フルフデノサヤ）」「釜屋（ナベズミノ火）」「鶯毛脛（チリメンザコ）」「炭尖（ヤキフデ）」といった珍しい題の詠物詩を多数その中に残しているのである。¹⁹そこには才気を競いあう詩壇の成熟が認められる。

一方、江戸詩壇においては市河寛齋（一七四九—一八二〇）が天明七年（一七八七）に昌平叢の啓事役を辞職し、以後江湖詩社を率いて詩人の育成と性靈説に拠る新しい詩風の展開につとめた。その活動は、江戸詩壇の詩風の格調派から性靈説への転化をもたらし、文化・文政期の江戸詩壇の隆盛に結実した。²⁰『海内才子詩』を編んだ柏木如亭は大窪詩仏（一七六七—一八三七）、菊池五山（一七六九—一八四九）、小島梅外（一七七二—一八四一）とともに江湖詩社の四才子の一人に数えられていた。

菊池五山の『五山堂詩話補遺』巻四には「詠蟻十五韻」という五山自身の作品が収められている。「余の蟻を詠む十五韻、孟子の語を櫟括す。実に一時の遊戯に出づ」と言うように『孟子』の中に出てくる語句を拾って十五韻の詩をなした所謂「集句詩」という遊戯詩である。²¹

詠蟻

經營(梁) 無所定(滕)
 裹糧(梁) 争出途(梁)
 自西又自東(公)
 負戴(梁) 且相扶(滕)
 紛紛(滕) 如婦市(梁)
 誰能遏其徂(梁)
 後車(滕) 忽報道
 当路(公) 螻蛄蛄(滕)
 千万往(公) 襲取(公)
 有似誅一夫(梁)
 狐較(万) 能幾許
 功必(公) 与衆(梁) 俱
 進退(公) 不失伍(公)
 仮道或於虞(万)
 沛然天下雨(梁)
 平陸(告) 水為汚(滕)
 芥舟不病涉(離)
 従流(梁) 無滯濡(公)
 已同超海(梁) 智
 将笑縁木(梁) 愚

經營 定まる所無く
 糧を裹みて争ひて途に出づ
 西自りし又東自りし
 負戴し且つ相扶く
 紛紛 市に帰くが如く
 誰か能く其の徂くを遏めん
 後車 忽として報道す
 路に当りては蛄蛄を螻し
 千万 往て襲ひ取る
 一夫を誅するに似たること有り
 狐較 能く幾許ぞ
 功は必ず衆と俱にす
 進退 伍を失はず
 道を仮り 或いは虞に於てす
 沛然 天雨を下す
 平陸 水汚を為す
 芥舟 渉るに病まず
 流れに従ひて 滯濡すること無し
 已に海を超ゆるの智を同じくし
 将に木の縁るの愚を笑はんとす

堦堵而相揖（離）

堵を踰えて相揖し

藁裡掩（滕）其枯

藁裡 其の枯を掩ふ

有封何不告（告）

封有りて何ぞ告げざらん

由路（万）寧為迂

路に由るを寧ぞ迂と為さんや

汝質雖微也（万）

汝が質 微なりと雖も

仁義性（告）庶乎（梁）

仁義 性庶からんか

無人（公）独隠几（公）

人無くば 独り几に隠り

耳官（告）把奇輪

耳官 奇を把て輪す

堂下有牛（梁）闕

堂下 牛の闕ふこと有らば

師聰（離）我為徒

師聰 我徒と為す

括弧で示した（梁）（滕）（公）（万）（告）（離）はそれぞれ『孟子』の梁恵王、滕文公、公孫丑、万章、告子、離婁の篇名を示す。『孟子』各篇から引いた語句は、その背景にある物語の力も加えて、詩の各句を形成しているのである。韻字も途・扶・徂・蛄・夫・俱・虞・汚・濡・愚・枯・迂・乎・輪・徒（上平七虞）と巧みに配置されている。修辭的な達成のレベルが見てとれるであろう。

「廻文」詩という遊戯的な詩が朝倉荆山という儒者兼漢詩人によって詩壇の片隅で詠まれた背景には右に挙げたような詩壇の成熟が与かっているに違いない。

〔注〕

- (1) 厲者太史菊坡安倍公、命柏如亭纂輯海内名人之詩。凡若干卷。皆就其所自録編列、不敢簡摺之。蓋恐失其本色也。(村瀨栲亭「海内才子詩序」)
- (2) 繡梓功畢、已在八九年前。如亭山人遊歷四方、在京日少。偶來亦席不及煖。以故未能校定。去秋七月、山人倏然下世。於是余校正之、以公四方。疎漏散脫、視者勿尤之。(鈴木竹坡「海内才子詩例言」)
- (3) 「日本國語大辭典」(小学館)
- (4) 正岡子規「分類俳句全集」第十二卷(アルス刊、昭和四年)より引いた。子規は「丙号分類、形式的並実質的、廻文」の中にこの句を含め計百三句の回文俳句を集めている。
- (5) 昨聞四庫館進呈書、有朱存孝編輯回文類聚補遺一種、内載美人八詠詩、詞意嫺狎、有乖雅正……(略)……朕輯四庫全書、当採詩文之闕世道人心者。若此等詩句、豈可以体近香奩概行採録。所有美人八詠詩、著即行撤出(文淵閣本「回文類聚」上論)
- (6) 文淵閣本の「補遺」に載せる作品は作者名の不同の問題はあるが、全て覚廬文庫本の中から拾うことが出来る。ただ、達磨と唐太宗の「回文」の後に載せる二回(「補遺二三葉表」)のみ覚廬文庫本には見られない。
- (7) 是書流伝、至今原本甚罕、止有明張之象增訂重梓一帙行世。但鐫刻潦草增益掛漏、更以明代作入於宋人纂輯之内、其謂非宜是。以悉仍桑氏原本、附以所增達磨唐宗二回、重鈔諸本。非有別事更張。惟欲一還前人之本来面目而已。(覚廬文庫本「回文類聚」原篇、朱象賢「回文類聚序」)
- (8) 窈滔妻蘇氏、始平人也。名惠、字若蘭。善屬文。滔、苻堅時為秦州刺史、被徙流沙。蘇氏思之、織錦為迴文旋回詩以贈滔。宛轉循環以說之。詞甚悽惋、凡八百四十字、文多不録。(「晋書」列女伝)。なお「八百四十字」は「八百四十一字」とあるべきか。
- (9) 「回文類聚」卷二所収の盤中回は円盤状の回である。しかし、「盤中詩」末尾の「当從中央周四角」という表現に従えば、方盤であった可能性も出てくる。「四庫全書總目提要」の「回文類聚」の項目では「実方盤而非円盤」と説く。
- (10) 詩余(詞)の回文は、「落花間院春衫薄、薄衫春院間花落、遲日恨依依、依依恨日遲、夢回鶯舌弄、弄舌鶯回夢、郵便問人羞、羞人問便郵」(蘇軾、菩薩蠻「間情」)のように二句ずつが回文の表と裏の關係で連続してゆく形式。「馬趁香微路遠、沙窺月淡煙斜、渡波清徹映妍華、倒綠枝寒風掛、掛風寒枝綠倒、華妍映徹清波渡、斜煙淡月窺沙、違路微香趁馬」(蘇軾、西江月「詠梅」)のように前闕と後闕が全く回文の表と裏の關係になる形式。「傾城一笑得人留、舞罷嬌娥斂黛愁、明月宝鞵金絡臂、翠瓊花珥碧搔頭、晴雲片雪腰肢嬾、晚吹微波眼色秋、清露庭臯芳草綠、輕綃柔掛玉簾鈎」(郭從範、瑞鷓鴣「席上」)のように全体を通して回文の表と裏になる形式など詞牌によって形式が異なり、複雑である。

- (11) 「四言」回文詩については「回文類聚」以外の文献に見えない。遼欽立輯校「先秦漢魏南北朝詩」は賀道慶の作として「藝文類聚」卷五十六に載せる離合詩一首を取めるのみである。「春遊」回文詩については「藝文類聚」卷五十六に齊の王融（四六七—四九三）の作として載せる。遼欽立輯校「先秦漢魏南北朝詩」もそれを襲う。
- (12) 晋傅咸有回文反覆詩二首云、反覆其文者以示憂心展転也。悠悠遠邁（我）独營營是也。由是反覆興焉。晋温嶠有回文虚言詩云、寧神静泊、損有崇亡。由是回文興焉。（「全唐詩」卷六百十六）。なお、「回文類聚」卷一の「璇璣図攷異」にこの皮日休「雜体詩序」は引かれている。傅咸の詩の「我」の字はそれにより補った。
- (13) 橘在列。詩名高世。亦闕系譜。源順僧師事焉。在列後為僧、更名尊敬。亡後順為輯遺稿名敬公集。今存者小作數篇已（江村北海「日本詩史」卷一）
- (14) 簡有儀「袁牧研究」（文史哲出版社、中華民國七十七年）
- (15) 大庭脩「江戸時代における 唐船持渡書の研究」（関西大学東西学術研究所、昭和四十二年）
- (16) 神谷東溪編並点「隨園詩話」卷六。なお、そこで作者名を張漢年としているのは、もともと「名漢。年七十余、重入詞館」の「年」の字を名の一部とした誤りである。
- (17) 揖斐高「江戸詩歌論」第一部第三章、性靈論（汲古書院、一九九八年）参照。
- (18) 姜亮夫「歷代名人年里碑伝総表」（台湾商務印書館、中華民國五十四年）に依れば、張漢は康熙十九年（一六八〇）に生まれ、乾隆二十四年（一七五九）に没しているとされる。とすれば、乾隆元年に五十七歳であるはずで「隨園詩話」の「年七十余、重入詞館」は年齢が合わない。徐世昌編「晚清移詩匯」卷七十一には張漢の「秋夜」回文を含む三首の詩が収められている。その小伝に「張漢、字月樵、石屏人。康熙癸巳進士、改庶吉士、授檢討、遷河南知府。乾隆丁巳補試博学鴻詞、復授檢討、遷御史」とある。併せて「月樵守河南、行果過宜陽、有甘棠棠、因補植棠十三本以存古蹟、一時題詠甚衆。既罷歸、復舉大科重入詞館、年七十余矣。改諫議、乞歸。胡稚威為序送行、称其「夷直茂厚過中州士大夫」云」という詩話を載せる。
- (19) 停雲会同人著「玩鴨先生詠物百首注解」（太平書屋、平成三年）、堀川貴司「太田玩鴨の詠物詩——十八世紀後半京都詩壇一斑——」（「国語と国文学」平成三年七月号、東京大学国語国文学会）参照。
- (20) 揖斐高「江戸詩歌論」第一部第一章、漢詩の隆盛（汲古書院、一九九八年）参照。
- (21) 集句詩については何文匯「雜体詩釈例」第五章、集句体（中文大學出版社、一九八六年）参照。